

## 島全体を利用した茶園 賀島園



賀島園全景図『賀寫圖』所収  
尾道市立美術館所蔵

向東の沖合いに浮かぶ無人島(昔は人家があった)「加島」は、海水浴場として遊んだ思い出を語る市民が多いが、江戸時代の昔には、この島は全島が「茶園」であった。

寛文年間(1661～1672)、尾道の初期豪商の一角を成す、泉屋・松本家(葛西家)が、広島藩への献金の褒美として、この島を賜ったのが事の発端で、当代の松本重政は、未開の地であった島を切り拓き、庭をしつらえ建物を築き、これを当家の茶園として整備したのである。そしてその茶園の名を、「賀島園」と称した。

賀島園は藩内に広くその名が知られたらしく、広島藩の三名園の内にも挙げられたという。また、元禄年間(1673～1680)には、広島藩主(浅野侯)も来島したと伝える。

当時の情景を今に偲び見るものに、尾道市立美術館蔵になる『賀島記』及び『賀寫圖(賀島図)』がある。前者は由来等を書き記し、後者は園内の景を美しく描き出したもので、茶園の情景をビジュアルに見てとれる一級の資料といえる。

なお、現在の加島には、その当時の痕跡として、石碑や石橋、石垣、土堀、築山・池跡、古井戸などが朽ちた中に散在し、静かに夢の跡を留めている。

## 塩田傍に築かれた茶園 海物園

かつては塩田が広がっていた対岸向島の富浜(西富浜地区)に築かれた茶園が、「海物園」であった。広島藩主浅野家の御用商人で、富浜一帯の塩田を経営した浜旦那・富島家(天満屋)の手によってしつらえられた茶園で、安芸の宮島、賀島園と並び、三名園の一つに数えられるほどに、優れた景観を呈したという。

それ故に文人墨客の往来も多く、園で詠まれた詩歌が多く残され、その内には頼山陽の叔父・頼春風、頼杏坪の作品も見られる。

園内に見られた茶室は、千利休が太閤秀吉好みで造ったもので、元々は秀吉の居城であった京都・伏見(桃山)城内に在った。徳川時代に浅野家の手に移り、これが富島家へと下って来たもので、江戸後期の1814(文化11)年、富島家から浄土寺へ寄進された。浄土寺庭園の内に建つ茶室「露滴庵」(国

## 尾道商業会議所記念館〈第20回企画展示解説〉

(2013年2月1日～2013年6月19日)

### テーマ 尾道に花開いた茶園文化

『茶園』と書いて『さえん』と読む。一般的には茶畑であるが、ここ尾道においては商家が設けた別荘・庭園を指して、『茶園』と呼んだ。茶園と呼称する由来などは何も伝わらないが、庭園の内にしつらえられた茶室と、そこでの茶の湯の嗜みが前面に出たものかとも考えられる。

茶園の全盛は江戸時代。商人でもとりわけ富裕な商人(豪商とも称される)達は、競って別荘・庭園を営み、客人を招き入れ、茶の湯や酒席で和み、また詩歌や文芸に興じるなど、風雅な時を茶園で過ごした。

招かれた客人のなかには、『日本外史』の著述で名高い、儒学者であり歴史家の頼山陽、山陽も一時身を寄せた福山神辺の教育者(儒学者・漢詩人)菅茶山、諸国を遊歴した南画家田能村竹田など、歴史にその名を知られた文化人も数多くいた。

書画を愛で、文筆活動も為すほどに、文化的素養の高かった尾道商人達は、これらを温かく迎え入れ、時には創作活動を支える良き理解者・支援者ともなって、芸術文化の振興にも寄与した。それはまた、尾道文化の興隆にも繋がったことは言うまでもない。

近代以降も茶園の名は残ったが、その大半が廃絶し、残ったものでも別荘の形態から本宅として利用されるようになったり、その語源にもなったと思われる茶室としての機能が失われて来たりと、時の流れに洗われて、茶園は変質を遂げながら今日へと至っている。

### 尾道茶園一覧

茶園の名(よみ)	所有した商家(屋号)	所在地 ※ 出典の表記等を参照	出典
賀島園(かしまえん)	松本家 旧・葛西家(泉屋)	向東町沖に浮かぶ加島	『賀島記』、『芸藩通志』など
島崎海物園(からすぎかいぶつえん)	富島家(天満屋)	向島町富浜	『芸藩通志』など
両宜樓(りょうぎろう)	豊田家	向島町富浜	『尾道志稿』
爽籬軒(そうらいけん)	橋本家(加登灰屋)	久保本通り東端	『竹下詩鈔』
抱翠園(ゆうすいえん)	熊谷家(金屋)	長江山城戸(千光寺山東斜面)	『芸藩通志』、『尾道志稿』など
柳陰亭(りゅういんてい)	島居家(住屋)	東土堂山手(千光寺山南斜面)	『尾道志稿』
千翠亭(せんすいてい)	橋本家(竹原屋)	久保町界限(正確な位置不明)	田能村竹田「日記」
静観園(せいかんえん)	内海家(すみ屋)	久保町界限(正確な位置不明)	田能村竹田「日記」
芙蓉亭(ふようてい)	吉井家	向島か?	『尾道志稿』
此君亭(しくんてい)	勝島家(鯛屋)	所在不明	『聴松庵詩集』
迷花樓(めいかろう)	不明	所在不明	田能村竹田「日記」
嘉樹堂(かじゅどう)	亀山家(油屋)	所在不明	『尾道志稿』
夢硯樓(むげんろう)	亀山家…亀山夢研	所在不明	頼山陽「夢硯樓記」

の重要文化財指定)がそれである。



浄土寺庭園に  
移築された茶室  
「露滴庵」



園の本体部に遺る巨岩  
には、滝の水を流した  
痕跡が確認される

## 千光寺山斜面地の茶園 挹翠園

千光寺山(大宝山)の東側斜面地に、江戸時代後期の宝暦年間(1751~64)、御調郡の割庄屋であった熊谷家が営んだ茶園で、その名を「挹翠園」という。

近代以降(とりわけ鉄道敷設以降)、それまで寺域のみで占められていた山手に人家が建ち始め、今に見る山手地区の景観が成立し、茶園も景観上好適地として林立して来る(大正期『尾道案内』に見る近代の茶園参照)。しかし、それ以前の時代では、山手の殆どは寺域であり、一般の人家が立ち入る余地は無かった。その中で唯一の例外として見られる茶園であり、或いは寺域の主体である南側ではなく、これが東側であったことがそれを許したのかもしれない。

園内は梅林、竹林、松林など種々の木々に囲まれ、巨岩奇岩が重なり合い、その中に茶室がしつらえられ、誠に風雅なる景を醸し出していた。それを愛でに訪れた文化人の内には、頼山陽、田能村竹田、平賀晋民(竹原出身の儒学者)などといった顔ぶれがあった。山陽はこの時の情景を、『遊挹翠園記』と題してしたためている。

また、この茶園には工房としての窯(登り窯と推定される)を附設していたらしく、園の本体部近くの竹林の中から、失敗作等を廃棄したものと思われる大量の土器片が採集されている。それらは主に煎茶器・酒器・花器類に分類され、茶園で繰り広げられた茶席、酒席において、恐らく興じられたものであろうと想像される。



挹翠園窯で焼かれた陶磁器類  
尾道遺跡発掘研究所蔵

## 近代の茶園から～和洋折衷の文化住宅

近代になると、茶園に見る屋敷の内に、新たな時代の風が吹き込む。それまでの純然たる日本家屋に、洋館建築が重なり合う、和洋折衷の文化住宅がそれである。

大正時代に登場したこの住宅様式は、洋風への憧れを住居の内に取り込んだもので、東京・横浜を皮切りに、新時代の建築様式として全国へ広まった。

建物の本体部分は和風建築で、洋館部分は主に玄関及び玄関脇の応接間において見られるのが一般的なスタイルであった。宮崎駿アニメ「となりのトトロ」の中で、サツキとメイの一家が引っ越した先で登場する古民家は、まさに和洋折衷の文化住宅の形式で描き出されている。実在の建物では、関東大震災後の1924(大正13)年、内務省によって建造された鉄筋コンクリート造りの「同潤会アパート」(東京・表参道ヒルズに再生)、その翌年に建てられた日本初の完全洋風住宅「文化アパート」(東京・御茶ノ水)などが代表的事例として知られる。

外からの新たなものを取り入れる港町尾道にも、この文化住宅のムーブメントが上陸し、主に旧市街の山手界限を中心に点在している。ただし、この時代の茶園は、冒頭でも紹介したとおり、純粹なる別荘の形態から本宅に転じている場合が多い。



茶園に見る文化住宅(長江地区の山手界限に立地)